

「奉」「本」「本」などと記された墨書土器に関する予備的考察

A Preliminary Study on the Earthenware
Written in “奉” “本” “本” with Ink in Ancient Japan有富 純也*
Junya Aritomi**Abstract**

This paper collects earthenware with ink inscription of “奉” and “本”, and analyses the characteristics of ruins from which the ink writing earthenware was excavated.

Earthenware with ink inscription of “本” is often excavated. According to Minami HIRAKAWA's research, this “本” is an abbreviation of “奉”. Putting these earthenware together and reviewing it, we would come to conclusions below. Firstly, these earthenware is excavated mainly in eastern Japan, but it is also found on a nationwide scale. Secondly, we can basically confirm that these earthenware was made in the late 8th century. And it was used in the Heijokyo Capital, then it spread to various areas. Thirdly, we can see the extensive influence of the earthenware as it has not only been excavated from remains of Kokuhu (provincial capital) and Kokubunji (provincial monastery), but also been found in the ruins of local government offices at township level and common villages.

On the other hand, as the same kind of abbreviation can also be seen on the ink writing earthenware that excavated of Silla, we assume that the ritual form of using these earthenware had been brought into Japan from Silla in the 8th century.

I. はじめに**

近年、古代日本の墨書土器に関する研究は目覚ましく発展している。個別には、各自治体から発行されている報告書などで詳細に検討されているものもあり、また、総体としては平川南氏（1998）をはじめとして、高島英之氏（2000）（2006）、三上喜孝氏（2013）などによる研究が積み重ねられている。土器に記された文字は多文字のものもあるが、ほとんどの場合は一文字ないし二文字で記されており、そこから歴史的事実を塗り替えるようなことは難しいものの、出土した地点の遺跡の性格を知るうえでは重要な資料となることがある。筆者もかつて、それまで読み切れていなかった墨書土器の文字を「大小穀」と読み、その出土地点が軍団である可

* 成蹊大学文学部、Faculty of Humanities, Seikei University

**本稿執筆にあたり、多くの方々からご協力を得た。特にご協力いただいたの方々のお名前を記し、感謝の意を表したい。

稲田奈津子 李炳鎬 大津朋美 小松玲菜 崔境真 三上喜孝 矢越葉子

能性を指摘したこともある（有富, 2011a）。

さて本稿では、墨書土器のなかで「奉」という文字に着目したい。平川南氏は、北海道大学構内のサクシュトコトニ川遺跡から、1982年に出土した土師器のへら書き文字を検討し、平川氏が検討するまで「夷」と解説されていたものを、先行研究（佐伯, 1986）（小口, 1993）や青森県青森市野木遺跡・千葉県佐倉市寺崎遺跡群向原遺跡・山形県寒河江市三条遺跡などの他遺跡から出土した墨書土器を精査することで、「奉」と解説すべきと論じた（平川, 1998）。

以上の平川氏の分析結果から、「奉」という文字が、「本」「夫」「本」など、様々な省略をされることが判明した¹。つまり、例えば「本」と読める土器の墨書が実は「奉」である可能性が極めて高いのである。後述するように、発掘調査によって「本」と報告されている土器は多数ある。「本」と読んだ場合に意味が取れないが、「奉」であれば、宗教的な奉斎に用いられる土器と考えることができ、「本」土器が出土した遺跡の性格が明らかになる可能性が高まると言えよう。

平川氏は国立歴史民俗博物館に勤務されていたという立場から、墨書土器のみならず、全国各地から出土した多くの出土文字資料を解説・認識・把握しており、そのため如上の分析が可能となったと言え、平川氏のような立場でなければできない貴重な業績であると評価することができる。しかし、平川氏の検討後、この省略された「本」土器の出土は多く確認されているものの、それらを総体的に検討したものは存在しない。

近年では明治大学古代学研究所において墨書土器を集成してデータベース化が行われており、それを利用すれば、平川氏の分析に匹敵するような総体的研究も可能かと思われる。そこで本稿はまず、平川氏の研究を継承しつつ、明治大学古代学研究所のデータベースを利用して、「奉」の略体字がどのように使用され、どの地域に広がっているかを確認する。その結果をもとに、古代日本列島における宗教文化の広がり方について論じられれば幸いである。

II. 「奉書土器」の分析

まずは具体的な分析から出発する。先述したように、「奉」などと記された土器は数多く出土しており、そのすべてを個人的に把握するのはほぼ不可能である。そこで、明治大学古代学研究所におけるデータベースを利用する。このデータベースは、いまだ完成しておらず、いくつかの道府県の集成は行われていない。また、例えば筆者がその集成を担当した静岡県に関しても、2010年3月以降に発表された発掘報告書を採用しておらず、最新の情報が得られていない場合もある（有富, 2011b）。しかし、すでに13万点以上の墨書土器（刻書土器、線刻土器なども含む）のデータが集成されており、また、北は岩手県、南は鹿児島県のデータが蓄積されているのだから、ある程度の傾向をつかむうえで利用することは可能であると考えられる。以下で示すデータが完璧なものでないということを認識したうえで、論を進めていくこととする。なお以下では、「奉」、あるいはその略字体が書かれているものを、「奉書土器」と略称する²。

「奉」「本」「本」「大十」と書かれた墨書土器を集成すると、以下のような特徴があることが知られる³。まずは地域と年代について簡単に整理したうえで、個別の遺跡についてもみていきたい。

¹ なお平川氏の論考発表後、佐伯有清氏（2003）は反論を試みている。また近年、三上喜孝氏（2016）も、「夫」という文字が『竜龕手鑑』の雑字部にみえることから、単純に「本」＝「奉」として良いものかと疑問を投げかけている。

² 本稿でも、墨書土器だけでなく、刻書土器なども含めている。

³ むろん、土器に文字を記した者が「奉」のつもりではなく、本来の「本」を書いた土器もあるだろう。その可能性を認識しつつも、にわかに区別することができないため、本来であれば公にすべき、「奉書

第一に、「奉書土器」出土遺跡を都道府県ごとにまとめた表1から知られるように、北海道から鹿児島県まで、「奉書土器」が存在しており、全国的に広がっていたことが知られる。ただし東日本、すなわち現在の関東地方や東北地方、特に千葉県に出土例が多いということに注意しておきたい。そもそも墨書土器自体、東日本に多いという傾向の考古遺物であり、一概に「奉書土器」が東日本、特に千葉県に多いと断定はできない。様々な可能性を考慮しつつ、注意深くデータを扱うこととしたい。

続いて、「奉書土器」が使用されていた時期をみてみよう。早い時期のものでは、やはり平城京を中心とした奈良県に遺物の出土がみられる。奈良県では土器ではないものの、7世紀後半のものと考えられるヘラ書き鞆羽口もある(奈文研, 1992: 99)。藤原宮期ののものであると考えられ、「本」と書かれたもののなかで、管見の限り最古のものであるが、鞆羽口であり、参考にとどめておくべきであろう。

翻って土器に限定し、8世紀代を中心とする時期の土器をみてみよう(表2)。奈良県のものでは、平城宮跡造酒司南辺の宮内道路で出土した須恵器の蓋、天井部外面に「本」と墨書されているものが出土しており、その年代は天平年間から天平宝字年間のものとしてされている(奈文研, 2003)。それ以外にも数点しかないが、奈良時代中期と思われるものもいくつか出土しているようである。

次に地方に目を向けると、天平年間以前と思しき「奉書土器」はみられないが、8世紀中期や奈良時代と編年されている土器は、埼玉県や千葉県など関東を中心にみられる。例えば埼玉県では、坂戸市塚の越遺跡で出土した須恵器の底部外面には墨書で「本」とあるが、SD1から出土したものは8世紀中ごろの土器だと推定されている(図1. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1991)。さらに千葉県では、鎌ヶ谷市双賀辺田No.1遺跡4号住居から出土した土師器の側部外面あるいは底部外面に「本」とあり、これも8世紀後半のものとして推定されている(図2. 鎌ヶ谷市教育委員会, 1988)。

平城宮跡出土の土器と塚の越遺跡あるいは双賀辺田No.1遺跡出土の土器は両者ともに8世紀中後期ごろのものとしてされている。もちろん、土器の編年は一年単位といった細かな年代まで探ることはできず、同じ8世紀中後期であろうとも、どちらが早くに使用されていたかを知ることは不可能である。しかし一般的に考えて、中央である平城宮から地方である東国に宗教儀礼のあり方が伝わり、そのため東国の人々は、土器に「本」と記したと考えるのが妥当であろう。

次に、この「奉書土器」が出土する遺跡の性格について、以下で考えたい。表1によれば様々な遺跡から出土しているが、千葉県を通覧してみると、一般集落の遺跡が多いようである。

その一方で、一般集落遺跡以外からも出土している。周防国府、武蔵国府、佐渡国府、志波城など国府あるいは城柵関連遺跡から数点出土しており、さらに、国分寺遺跡からも数点ながら出土している。信濃国分寺付近、上野国分寺付近、下野国分寺、武蔵国分寺などでみられる。

また、「奉書土器」が出土している遺跡のなかで、「奉」とそれ以外(「本」など)が入り混じっていることは基本的にないという点にも注目したい。ほぼ唯一の例外が、三条遺跡と三ツ寺Ⅱ遺跡である。そこで、この2つの遺跡の性格についてまとめておきたい。



図1

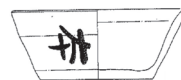


図2

土器」すべてを集成した詳細な表を掲載することを断念した。あらためて整理し、また、いかなる形式の表がよいのかを熟慮したうえで、別の媒体で公表したいと考えている。

表1 「奉書土器」出土の遺跡と都道府県(稿)

都道府県名	遺 跡 名		
北海道	サクシュコトニ川遺跡(1)	大川遺跡(1)	
青 森	野木遺跡(1)	野尻遺跡(2)	
岩 手	志波城跡(2)	小幡遺跡(1)	本宮熊堂B遺跡(2)
	野古A遺跡(1)	飯岡才川遺跡(3)	三ヶ尻荒巻横道上(1)
	細谷地遺跡(2)	向中野館遺跡(3)	乙部方八丁遺跡(1)
	上八木田I遺跡(1)	神様屋敷遺跡(1)	庫理遺跡(1)
	貝の淵I遺跡(1)	下谷地B遺跡(1)	本宿羽場遺跡(1)
	煤孫遺跡(1)	蒼前森遺跡(1)	境遺跡(1)
	河崎の柵擬定地(1)	大明神II遺跡(1)	海上I遺跡(1)
	広沖遺跡(2)	銭神平遺跡(1)	上の山VII遺跡(1)
	杉の堂遺跡(2)	南矢中遺跡(1)	伯濟寺遺跡(1)
	落合II遺跡(158)	金田館跡(1)	古館橋遺跡(2)
古館二日町新田遺跡(1)			
宮 城	南小泉遺跡(2)	桃生城遺跡(1)	市川橋遺跡(21)
	山王遺跡(4)	多賀城遺跡(2)	伊治城遺跡(1)
	堤根遺跡(1)	桜館遺跡(1)	赤鬼上遺跡(1)
秋 田	秋田城跡(5)	小谷地遺跡(1)	西野遺跡(1)
山 形	向河原遺跡(1)	梅野木前1遺跡(2)	北向遺跡(1)
	馳上遺跡(2)	興屋川原遺跡(2)	山田遺跡(2)
	矢馳A遺跡(1)	西谷地遺跡(1)	生石2遺跡(6)
	三条遺跡(39)	富山2遺跡(1)	高瀬山遺跡(1期)(2)
	高瀬山遺跡(HO地区)(2)	加藤屋敷遺跡(2)	植木場一遺跡(1)
	北目長田遺跡(1)	浮橋遺跡(4)	大坪遺跡(2)
上高田遺跡(3)			
福 島	勝口・前畑遺跡(2)	仙台内前遺跡(1)	台畑遺跡(2)
	上吉田遺跡(2)	広網遺跡(1)	咲田遺跡(1)
	大根畑遺跡(1)	東丸山遺跡(1)	荒田目糸里遺跡(1)
	荒田目糸里遺構(1)	長者屋敷遺跡(1)	林の前遺跡(1)
	泉平館遺跡(11)	広畑遺跡(1)	古屋敷遺跡(1)
	滝原前山C遺跡(1)	小又遺跡(1)	松並平遺跡(1)
	下悪戸遺跡(2)	達中久保遺跡(1)	柳作A遺跡(1)
赤粉遺跡(2)			
茨 城	梶内遺跡(2)	鹿の子A遺跡(1)	餓鬼塚遺跡(1)
	鹿の子C遺跡(1)	寺崎台地遺跡(1)	三本松遺跡(1)
	源台遺跡(1)	中原遺跡3(5)	中原遺跡2(1)
	武田石高遺跡(1)	武田西端遺跡(7)	栗林遺跡(1)
	厨台7・8遺跡(1)	鎌田遺跡(1)	大戸下郷遺跡2(1)
	根本遺跡(1)	北田遺跡(1)	
栃 木	北の前遺跡(1)	上神主・茂原遺跡(1)	クジラ山西遺跡(1)
	館之前遺跡(2)	八幡根東遺跡(1)	寺野東遺跡(2)
	金山遺跡(4)	鶴田A遺跡(10)	滝田本郷遺跡(1)
	新開遺跡(1)	下野国分寺跡(2)	多功南原遺跡(3)
	免の内台遺跡(1)	東林南遺跡(1)	
群 馬	二之宮谷地遺跡(1)	熊野堂遺跡(1)	上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)
	三ツ寺II遺跡(32)	石橋地蔵久保遺跡(1)	東今泉鹿島遺跡(2)
	中江田原遺跡(1)	空沢遺跡(1)	八木原沖田III遺跡(1)
	白井二位屋遺跡(1)	松井田工業団地遺跡(1)	五料山岸遺跡(1)
	黒熊栗崎遺跡(1)	多比良追部野遺跡(1)	楡木II遺跡(1)
埼 玉	櫛谷遺跡(1)	諏訪木遺跡(3)	飯塚北遺跡(6)
	前中西遺跡(1)	今井遺跡(1)	将監塚遺跡(2)
	西浦遺跡(1)	森坂北遺跡(1)	塚の越遺跡(1)
	一天狗遺跡(1)	東久保南遺跡(1)	皂樹原遺跡(1)
東 京	武蔵国府(3)	武蔵国府関連遺跡(7)	清水が丘遺跡(1)
	落川遺跡(1)	武蔵国分寺跡(2)	仮屋上遺跡(1)
	下宿内山遺跡(5)	上賀多遺跡(1)	
千 葉	有吉遺跡(1)	鷲谷津遺跡(1)	小金沢古墳群(1)
	稲荷台遺跡(3)	本郷台遺跡(1)	印内遺跡(1)
	下総国分遺跡(1)	国府台遺跡(1)	村上込の内遺跡(1)
	権現後遺跡(1)	白幡前遺跡(1)	島田込ノ内遺跡(4)
	上谷遺跡(1)	町畑遺跡 F地点(3)	町畑遺跡 G地点(1)
	双賀辺田No1遺跡(7)	大堀込遺跡(1)	大宮戸大新田遺跡(1)
	新山I(LOC1)遺跡(1)	外小代(LOC40)遺跡(8)	囲護台遺跡(3)
	大袋腰巻遺跡(2)	馬場扇作遺跡(1)	唐塚遺跡(1)
	南囲護台遺跡(1)	江原台遺跡(4)	寺崎遺跡群 向原遺跡(86)
	寺崎遺跡群 一本松遺跡(1)	大崎台遺跡(2)	樺作遺跡(1)
	高岡大山遺跡(4)	南広遺跡(1)	城次郎丸遺跡(1)

	馬橋鷺尾余遺跡(1) 油作第2遺跡(4) 鳴神山遺跡 I 地点(1) 西根遺跡(2) 中内原遺跡(4) 飯塚遺跡群 柳台遺跡(1) 滝東台遺跡(1) 南麦台遺跡(1) 大綱山田台遺跡群 No.4B地点(南前野遺跡・道門坊西遺跡)(1) 大綱山田台遺跡群 No.6地点(一本松遺跡)(2) 大綱山田台遺跡群 No.8地点(升形遺跡)(2) 大綱山田台遺跡群 No.9地点(猪ヶ崎遺跡)(18) 大綱山田台遺跡群 No.10地点(小西平台遺跡)(2) 大綱山田台遺跡群 No.11地点(宮山遺跡)(1) 庄作遺跡(7) 神山谷遺跡(1) 上大城遺跡(2) 下総国分寺跡(1) 大宮越遺跡(1) 押畑広台遺跡(1) 谷津貝塚(4) 小屋ノ内遺跡(3) 館ノ山遺跡(1) 清戸遺跡(1) 中島遺跡(2)	長勝寺脇館跡(3) 船尾白幡遺跡(3) 鳴神山遺跡 II 地点(1) 吉原三王遺跡(1) 林遺跡(1) 平木遺跡(1) 天王遺跡(1) 大綱山田台遺跡群(1) 谷窪・上梁遺跡(1) 夏台遺跡(1) 大森第1遺跡(1) 国分遺跡(1) 北下遺跡(1) 船形手黒遺跡(1) 上総国分僧寺跡(3) 南作遺跡(1) 角田台遺跡(1) 本佐倉北大堀遺跡(1)	塚越遺跡(1) 駒形北遺跡(1) 鳴神山遺跡 III 地点(1) 南借当遺跡(2) 多古台遺跡群(1) 川代遺跡(1) 鷺山入遺跡(1) 小池元高田遺跡(1) 文脇遺跡(1) 中野台遺跡(1) 須和田遺跡(1) 東中山台遺跡群(3) 水神台 I 遺跡 第3地点(1) 荒久遺跡(2) 稻荷塚遺跡(2) 南西ヶ作遺跡(2) 芝崎遺跡(1)
新潟	石動遺跡(2) 野中土手付遺跡(1) 下国府遺跡(3) 山口台遺跡群 上台遺跡(1) 構之内遺跡 A地区(3) 大庭築山遺跡(1)	小丸山遺跡(1) 三十刈・堂の下遺跡(1) 中倉遺跡(1) (四之宮)天神前遺跡(1) 構之内遺跡(1) 東大竹遺跡群(1)	の場遺跡(2) 発久遺跡(1) 枯木A遺跡(1) 梶谷原A遺跡(2) 真田・北金目遺跡群(1) 海老名本郷遺跡(1)
富山	任海宮田遺跡(1)		
石川	三浦遺跡(2) 横江荘遺跡(1) 加茂遺跡(2) 金石本町遺跡(2) 今町A遺跡(1) 戸水大西遺跡(4)	三浦遺跡(三浦・幸明遺跡)(2) 木津遺跡(1) 春木ハチノタ遺跡(1) 戸水C遺跡(2) 千木東遺跡(1) 畝田西遺跡群(4)	法仏遺跡(2) 辰口西部遺跡群(3) 上荒屋遺跡(4) 千木ヤシキダ遺跡(14) 磯部カンダ遺跡(1)
山梨	ヂクヤ遺跡(1) 鋳物師屋遺跡(1) 寺所遺跡(1) 柳坪遺跡(1) 龍角西遺跡(1) 甲斐国分尼寺跡遺跡(1)	堀之内原遺跡(3) メ木遺跡(1) 旧菅原小学校遺跡(8) 東原遺跡(1) 梅之木遺跡(9) 狐原遺跡(1)	宮ノ前遺跡(1) 城下遺跡(2) 古御所東遺跡(1) 紺屋遺跡(1) 大原遺跡(5) 堂所遺跡(2)
長野	平林東沖遺跡(1) 小池遺跡(2) 中原遺跡群(1) 福島遺跡(1) 円正坊遺跡(1) 吉野遺跡(3)	榎田遺跡(5) 国分寺周辺遺跡群(1) 大塚原遺跡(25) 構井・阿弥陀堂遺跡(1) 濁り遺跡(1)	篠ノ井遺跡群(2) 恒川遺跡群(1) 伊那・福島遺跡 D地区(1) 栗毛坂遺跡(3) 屋代遺跡群(21)
静岡	城山遺跡(1) 箱根田遺跡(1) 御子ヶ谷遺跡(1)	曳舟遺跡(1) 旗指古窯跡(1) 湖西運動公園内遺跡(1)	双葉町遺跡(1) 鎌田・楯影遺跡(1) 天の川遺跡(11)
京都	長岡宮跡(5)	長岡京跡(9)	
奈良	山田道遺跡(1)	平城宮跡(15)	平城京跡(11)
鳥取	山ヶ鼻遺跡(1)	博労町遺跡(1)	
山口	周防国府跡(1)	岩戸遺跡(1)	
香川	多肥松林遺跡(3)		
福岡	東那珂遺跡(8) へボノ木遺跡(1)	柏原遺跡群M遺跡(1) 観世音寺 推定小子房跡(1)	比惠遺跡群(1) 辛野祭祀遺跡(1)
佐賀	ウー屋敷遺跡(3)	西山田三本松遺跡(1)	大黒町遺跡(1)
鹿児島	柳ガ迫遺跡(3)		

※1 「奉書土器」が出土している遺跡を都道府県ごとにまとめた。遺跡の後に記載した()内の数字は、その遺跡から出土した「奉書土器」の数を表している。

※2 明治大学古代学研究所のDBで公表していない道府県は、基本的に掲載していない。ただし、北海道・青森県・宮城県・福島県については『青森県史』によって作成した。

※3 「奉」「本」「本」「大十」を基本的に採用したが、一部「八十」なども採用している場合がある。

表2 8世紀以前に出土した可能性のある「奉書土器」(稿)

府県	遺跡名	出土遺構	釈文	器質	器種	記銘部位	年代	墨・刻など
奈良	山田道遺跡(第4次)	炭層	大十(本カ)		籬羽口	体部外面	藤原宮期	ヘラ
	平城宮跡(第7次)	SE311B(推定大膳 職南辺井戸第2期)	八十/中 底部内面	土師器	皿A	底部内面 底部外面		墨書
	平城宮跡(第13次)	SK820	本□	土師器	坏A I	体部外面		墨書
	平城宮跡(第22次南)	SD3410(平城宮東 面内堀)	□(本カ)	土師器	坏または皿	底部外面		墨書
	平城宮跡(第29次)	SD3410	八十	須恵器	坏B	体部外面		墨書
	平城宮跡(第32次)	SD4951-1(宮城東 面外堀南北溝)	本	須恵器	坏B蓋	天井部内面		墨書
	平城宮跡(第39次)	SD5050	本	須恵器	坏B蓋	天井部内面		墨書
	平城宮跡(第122次)	SD1250	八十	土師器	坏A	底部外面		墨書
	平城宮跡(第128次)	包含層ほか	本	土師器	坏または皿	底部外面		墨書
	平城宮跡(第154次)	SD2700	本	土師器	椀	底部外面		墨書
	平城宮跡(第154次)	SD2700	本	土師器	坏A	体部外面		墨書
	平城宮跡(第154次)	SD2700	本	土師器	坏または皿	底部外面	749~765年の木 簡が伴出	墨書
	平城宮跡(第172次)	SD2700④(内裏東 方東大溝地区)	□(奉カ)/□	土師器	坏または皿	底部外面		墨書
	平城宮跡(第259次)	SD11600(造酒司 南辺・宮内道路)	□(八カ)十	土師器	坏または皿	底部外面		墨書
	平城宮跡(第259次)	SD16742(造酒司 南辺・宮内道路)	本	須恵器	杯B蓋	天井部外面	740年前後以降、 757~765年まで	墨書
	平城宮跡(第274次)	SD4951(式部省・ 神祇官・東面大垣)	□□ (八十カ)	土師器	坏または皿	底部外面		墨書
	平城京左京一条三坊 十五・十六坪	東三坊大路東側溝 SD650	本	灰釉 陶器	皿B	底部外面	出土遺物は平安 時代初期のもの	墨書
	平城京左京二条二坊・ 三条二坊	溝SD5100 炭層	八十	須恵器	杯B	底部外面	奈良時代前半	墨書
	平城京左京二条二坊・ 三条二坊	東二坊々間路 東 側溝SD4701	本	土師器	杯A I カ 皿A I カ	底部外面	奈良時代	墨書
	奈良女子大学構内遺跡 (大学院・一般教養棟(F 棟)予定地)	溝SD2842	本□	土師器	杯A	底部外面	平城宮Ⅲ期	墨書
	平城京左京三条一坊七 坪(推定大学寮)	旧河川流路 SD6100	本	—	杯Aカ 杯Bカ、蓋	蓋や身の外 面	奈良時代後半	墨書
	平城京左京四条四坊 十四坪	坪内区画道南側溝 SD41	本	須恵器	皿C	底部外面	8世紀末~9世紀 初	墨書
	平城京左京四条六坊 十四坪	井戸SE04	本	土師器	杯A	底部外面	8世紀中~後	墨書
	平城京左京六条三坊十 坪	東堀河SD09	□[本カ]	須恵器	杯Bカ 皿Bカ	底部外面	8世紀	墨書
	平城京左京七条一坊 十五・十六坪	溝SD6400	(記号カ、 「八」に「十」)	土師器	杯A	体部外面	奈良時代末~12 世紀	墨書
	平城京右京二条三坊 十一坪	西三坊坊間路西側 溝SD103	本	土師器	杯Aカ 椀Aカ	底部外面	8世紀後	墨書
	平城京右京二条三坊二 坪	西二坊大路西側溝 SD103	八十	須恵器	杯A	底部外面	8世紀	墨書
	京都	長岡京跡左京第203次 (7ANXYD-2地区) 左京一条三坊六・十一 町、戌亥遺跡	溝SD50	(人面) 本	土師器	皿	内面 外面	長岡京期
長岡京跡左京第140次 (ANXWD-1地区) 左京四条三坊三町、二 坊十四町		包含層	本	須恵器	蓋	外面	長岡京期	墨書
長岡宮跡第193次 (7AN19F地区) 西辺官衙、南山遺跡		溝SD19301	□(本カ)	須恵器	坏	底部外面		墨書
長岡宮跡第277次 (7AN1F地区) 北辺官衙(北部)・宮城 東面大垣・東一坊大路、 渋川遺跡		溝SD27701	本	土師器	坏B蓋	つまみ部	長岡京期	墨書
長岡宮跡第277次 (7AN1F地区) 北辺官衙(北部)・宮城 東面大垣・東一坊大路、 渋川遺跡		溝SD27701	本	須恵器	坏か皿	底部外面	長岡京期	墨書

	長岡京跡左京第22・51次(7ANESH-2・4地区)左京三条二坊八町	溝SD1301	□(奉に近似)	土師器	椀A	底部外面	長岡京期	墨書
	長岡京跡左京第22・51次(7ANESH-2・4地区)左京三条二坊八町	溝SD1301	□(奉に近似)	土師器	—	底部外面	長岡京期	墨書
	長岡京跡左京第22・51次(7ANESH-2・4地区)左京三条二坊八町	溝SD1301	□(奉に近似)	土師器	皿A	底部外面	長岡京期	墨書
	長岡京跡左京第120次(7ANFZN-2地区)二条大路、東二坊第一小路、東二坊坊間小路交差点	溝SD12026	本□	須恵器	坏B	底部外面 底部内面	長岡京期	墨書 墨痕
	長岡京跡左京第120次(7ANFZN-2地区)二条大路、東二坊第一小路、東二坊坊間小路交差点	溝SD12031	本	須恵器	坏B	底部外面	長岡京期	墨書
	長岡京跡左京第356次(7ANFGB-3地区)左京三条二坊六町、三条条間南小路・東二坊坊間小路	池状遺構 SG356103	本	土師器	椀A	底部外面	長岡京期	墨書
	長岡京跡左京第473次東二坊大路・二条条間大路交差点、左京二条二坊十五町、二条三坊二町	溝SD47310(東二坊大路西側溝)	奉	須恵器	坏B蓋II	頂部外面	長岡京期	墨書
	長岡京跡右京第333次(7ANINE-6地区)右京三条二坊五町・三条第二小路、今里北ノ町遺跡	掘立柱建物 SB33302周辺包含層	本(大十カ)/ 本(大十カ) □	須恵器	坏A	体部外面 底部外面	長岡京期	墨書
	長岡京跡右京第296次(7ANISB-3地区)右京三条二坊八町	土坑SX04	奉/□	土師器	杯A	底部外面	長岡京期	墨書
石川	三浦遺跡	遺物包含層	八十、 ×(記号)	須恵器	杯	底部外面	8世紀末	墨書
	三浦遺跡	遺物包含層	八十	須恵器	杯	底部外面	8世紀末	墨書
	三浦遺跡(三浦・幸明遺跡)	掘立柱建物SB15(Ⅷ区P1072)	八十	須恵器	蓋	外面	8世紀中頃～9世紀初頭	墨書
	三浦遺跡(三浦・幸明遺跡)	Ⅷ区 上層 土坑SK49	八十	須恵器	杯	底部外面	8世紀末～9世紀初頭	墨書
	木津遺跡	30区 L・M1～6 遺物包含層	大十	須恵器	杯	底部外面	8世紀第3四半期カ	墨書
	上荒屋遺跡	溝SD40	山本\本	須恵器	杯	体部外面～ 底部外面\ 底部内面	8世紀末～9世紀初頭	墨書
	金石本町遺跡	河道跡	□[本カ]	須恵器	杯	底部外面	8世紀中頃～9世紀初頭	墨書
	千木東遺跡	遺物包含層	本	須恵器	杯	底部外面	8世紀後半～9世紀	墨書
	畝田西遺跡群	A2区 溝SD08	□□(奉カ)	須恵器	有台杯	底部外面	8世紀前半～後半	墨書
	畝田西遺跡群	A2区 溝SD08	□[本カ]田	土師器(赤彩カ)	椀	底部外面	8世紀前半	墨書
静岡	鎌田・楸影遺跡	9層	本 本	灰釉 陶器	碗	体部外面 底部外面	奈良時代	墨書
埼玉	今井遺跡 C地点	第1号井戸跡	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半から末	墨書
	森坂北遺跡	第2号住居跡	奉	須恵器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書 墨書
山梨	塚の越遺跡	第1号溝跡	本	須恵器	坏	底部外面	8世紀中	墨書
	甲斐国分尼寺跡遺跡	3-11住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀	墨書
栃木	館之前遺跡	HT-35	本	須恵器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	鶴田A遺跡	SD-15、10列	□(秦ないし 秦ないし奉)	須恵器	坏	体部外面	8世紀後半	墨書
	多功南原遺跡	SI-819	梨□(本ないし 大に十)	須恵器	蓋	天井部内面	8世紀後半	墨書
	免の内台遺跡	75号住居跡	□□ (本カ八十)	須恵器	坏	底部外面	8世紀後半	
茨城	中原遺跡3	335号住	本	土師器	坏	体部外面	8世紀後	墨書

	印内遺跡	1-2竪穴住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	双賀辺田No.1遺跡	4竪穴住居	本本	土師器	坏	体部外面 底部外面	8世紀後半	墨書
	双賀辺田No.1遺跡	4竪穴住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	双賀辺田No.1遺跡	4竪穴住居	□(本カ)	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	双賀辺田No.1遺跡	4竪穴住居	本本	土師器	坏	体部外面 底部外面	8世紀後半	墨書 墨書
	双賀辺田No.1遺跡	4竪穴住居	□(本カ)	土師器	坏	体部外面	8世紀後半	墨書
	双賀辺田No.1遺跡	7竪穴住居	□(本カ) 本	土師器	坏	体部外面 底部外面	8世紀後半	墨書
	双賀辺田No.1遺跡	14竪穴住居	本本	土師器	坏	体部外面 底部外面	8世紀後半	墨書
	新山 I (LOC1) 遺跡	4竪穴住居	本	土師 赤色	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	外小代 (LOC40) 遺跡	22竪穴住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書 墨書
	外小代 (LOC40) 遺跡	33竪穴住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書 墨書
	外小代 (LOC40) 遺跡	38竪穴住居	本本	土師器	坏	底部内面 底部外面	8世紀後半	墨書 墨書
	外小代 (LOC40) 遺跡	38竪穴住居	本本	土師器	坏	底部内面 底部外面	8世紀後半	墨書 墨書
	外小代 (LOC40) 遺跡	38竪穴住居	本本	土師器	坏	底部内面 底部外面	8世紀後半	墨書
	外小代 (LOC40) 遺跡	38竪穴住居	本本	土師器	坏	底部内面 底部外面	8世紀後半	墨書
	外小代 (LOC40) 遺跡	38竪穴住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
千葉	寺崎遺跡群 向原遺跡	37竪穴住居	本	土師器	坏	体部外面	8世紀後半	墨書
	寺崎遺跡群 向原遺跡	37竪穴住居	本	土師器	坏	体部外面	8世紀後半	墨書
	寺崎遺跡群 向原遺跡	53竪穴住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	寺崎遺跡群 向原遺跡	53竪穴住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書 墨書
	南広遺跡	31竪穴住居	奉	土師器	坏	底部外面	8世紀中前半	墨書
	船尾白幡遺跡	104竪穴住居	本本	土師器	坏	体部外面 底部外面	8世紀後葉～ 9世紀初頭	墨書
	西根遺跡	5流路	神奉 工	土師器	坏	体部外面	8世紀第4四半期 ～9世紀初頭	線刻
	庄作遺跡	69竪穴住居	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	谷窪・上楽遺跡	44竪穴住居	□□ (神奉カ)	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	東中山台遺跡群(37)	竪穴建物SI-001	本	土師器 (内面黒色)	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	水神台 I 遺跡 第3地点	1号竪穴建物	大千(「本」の 可能性あり)	土師器	坏	体部外面	8世紀後葉	墨書
	谷津貝塚(X-09地点)	竪穴住居SI-0002	[] [本一カ 大土カ] □	土師器	杯	体部外面 底部外面	8世紀後半～9世紀	墨書
	谷津貝塚(X-09地点)	竪穴住居SI-0002	□ [本カ]	土師器	杯	底部外面	8世紀後半～9世紀	墨書
	小屋ノ内遺跡	竪穴住居SI-108	山□ [大カ 本カ本カ]	須恵器	高坏	体部外面	奈良時代中頃～ 平安時代初頭	刻書 (線刻)
	小屋ノ内遺跡	竪穴住居SI-300	夫夫	須恵器	杯	体部外面 底部外面	奈良時代末～平安 時代初頭(Ⅱ期)	墨書
	館ノ山遺跡	東調査区 土坑SK- 001	□人神奉	須恵器	杯	体部外面	8世紀末～9世紀 初頭	朱書
	本佐倉北大堀遺跡	4号竪穴建物	奉	土師器	杯	底部内面	8世紀末～9世紀 初頭	墨書
	野古A遺跡	竪穴住居跡RA083	□ [本カ]	土師器	坏	体部外面	奈良時代	墨書
福島	広網遺跡	41号竪穴(貯蔵穴)	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	刻書
	泉平館遺跡	1号流路	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	泉平館遺跡	1号流路	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	泉平館遺跡	1号流路	□ [本カ]	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	泉平館遺跡	1号流路	本	土師器	台付坏	底部内面	8世紀後半	刻書
	泉平館遺跡	1号流路	□ [本カ]	須恵器	台付坏	底部外面	8世紀後半	墨書
	柳作A遺跡	1号竪穴(カマド)	本	土師器	坏	底部外面	8世紀後半	刻書
	桃生城跡	表土	本	須恵器	台付坏	底部外面	8世紀3/4期	墨書
宮城	多賀城跡	SK2326土坑	本	須恵器	小壺	底部外面	8世紀後半から 9世紀前半	刻書
	伊治城跡	SI13竪穴(堆積土)	本	須恵器	蓋	外面	8世紀後半	墨書

※1 ここでは平安時代にまでかかるもの、例えば「奈良時代末～平安時代初頭」「8世紀末～9世紀初頭」などといったものも採用したが、「奈良・平安」とある場合は採用しなかった。

※2 明大DBに年代が記されていないものは採用していない。

III. 個別事例の検討 1

1. 三条遺跡（山形県埋蔵文化財センター，2001）

三条遺跡は、山形県寒河江市に存在する集落遺跡である。1995年から1997年にかけて、山形県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている。

遺構に関して確認しておく。集落遺跡は縄文時代から奈良・平安期までのものが、城館跡は中世・近世のものが発掘されている。ここでは、「奉書土器」が出土した平安時代のものを中心に検討する。平安時代の遺構は、竪穴建物・掘立柱建物・井戸・溝・土坑・水田・河川が検出されている。そのなかで「奉書土器」が出土しているのは、河川の遺構であるSG134とSG323である。ここから、須恵器・土師器・木製品が多量に出土しており、また木簡も出土している。木簡は、「□五日田主大伴部廣□〔嶋刈〕」とあり、その形状は上下とも原型をとどめておらず、不明な点が多い。

「奉」と記された土器は、三条遺跡から出土した墨書土器437点のなかで、二番目に多く出土している。正確に「奉」と記していると思しきものもあれば、それが崩れたもの、あるいは「本」「八十」「大十」とも読み取れるものなどがあり、他の遺跡にはないバラエティに富んだ字形が、一つの遺跡内にみられるのが特徴的と言えよう（平川，1998：411）。この遺跡は、「本」「八十」「大十」とも読み取れる文字が「奉」の略字体であることを示しているという、平川氏の根拠ともなっている、重要な遺跡である。

2. 三ツ寺Ⅱ遺跡（群馬県埋蔵文化財事業調査団，1989～1991）

次に、三ツ寺Ⅱ遺跡をみよう。三ツ寺Ⅱ遺跡は、群馬県群馬郡群馬町（現在の高崎市）に存在する集落遺跡と考えられる。1980年、および1983年から84年まで、群馬県教育委員会によって発掘調査が実施されている。

遺構は、縄文から中世の各時代にわたって検出されているが、主体となるのは古墳時代のものである。5世紀後半から9世紀ごろを中心に住居が営まれていた。特に5世紀後半はちょうど三ツ寺Ⅰ遺跡⁴の居館が築造・改築された時期に相当し、その近傍の集落である三ツ寺Ⅱ遺跡こそ、その居館を支えた住民たちの居住地であった、と推測されている（群馬県埋蔵文化財事業調査団，1991：241）。また、居館である三ツ寺Ⅰ遺跡が衰退した6世紀にはいっても、この近傍の集落から住民は減らなかったとも考えられている（群馬県埋蔵文化財事業調査団，1991：242）。出土遺物は土器など無数にあり、文意不明ながら、習書木簡と思しきものも出土している。

「奉書土器」は、1区1号井戸から多量に出土している。ここから出土した遺物は8世紀から9世紀前半のものであり、習書木簡もここから出土している。「奉書土器」は土師器の坏が圧倒的に多く、また、8世紀中ごろから9世紀初頭のものとも推測される。「奉」と読めるものが多いが、先入観を排せば、「夫」「本」としか読めないものも数点あることが注目される。

この1号井戸の性格について、報告書によれば、斎串やモモ・クリ・ヒョウタンなどの自然遺物も存在することから、集落内での水辺祭祀の場合、そこに隣接する半ば恒常的な遺物廃棄の場となっていたと考えられる（群馬県埋蔵文化財事業調査団 1991：138～139）。

この遺跡全体の性格について、報告書に依拠しつつ述べておこう。習書木簡の存在から、「文字を日常的に操る階層の人々が存在した場所」一勿論、木簡のみからでは具体的な性格について

⁴ 三ツ寺Ⅰ遺跡については（若狭，2004）参照。

は何一つわからないが一の一つと想定できるであろう」と述べ（群馬県埋蔵文化財事業調査団, 1991 : 155）、また別の部分では、「官衙とは直接結びつかないまでも『上野国内の中枢域を取り巻くムラ』といった地域性によると考えられる。すなわち『国府や国分寺を望見でき、往来が可能な位置と関係』が遺構や遺物の出土背景」とも述べている（群馬県埋蔵文化財事業調査団, 1991 : 169）。

以上のように報告書では慎重に断定を避けているが、単なる集落遺跡から木簡や墨書土器が大量に出土するとは思えず、里長や郷長、あるいは郡雑任クラスが生活していた集落かもしれない。

以上、2つの遺跡を検討してきた。2つという少ない遺跡ではあるが、「奉」と「本」などが混在する遺跡が存在しているということは、これらが同じ意味で用いられている可能性も示していよう。

しかし、三条遺跡と三ツ寺Ⅱ遺跡はあくまでも例外的である。そこで次に、「奉書土器」をある程度多く出土している遺跡を検討しよう。

IV. 個別遺跡の事例検討 2

ここでは、基本的に25点以上の「奉書土器」が出土している遺跡について概観する。

1. 大塚原遺跡（長野県）（長野県小諸市教育委員会, 1994）

大塚原遺跡は、長野県小諸市大字御影新田字大塚原に存在する遺跡であり、1994年に小諸市教育委員会によって発掘調査が行われている。

調査の結果、弥生時代から古墳時代初期、および奈良時代から平安時代までの時期の遺構が検出されている。奈良時代から平安時代においては、竪穴住居、掘立柱建物、土坑が検出されている。遺物は、土器を中心に、鉄製品・石製品・木製品、延暦15年（796）に鑄造が開始された隆平永宝も出土している。

竪穴住居のうち、23棟が奈良時代から10世紀にかけての遺構と考えられており、そこから「奉書土器」も25点以上出土した。それ以外の墨書土器に関しては、「木」「万」「倉」などがある。特に第16号住居址からは10点もの「本」「大十」が発見されている。ただし「奉」は出土していない。

報告書では、どのような遺跡であるかについて明言を避けているが、基本的には一般集落と考えて良いだろう。

2. 屋代遺跡群（長野県）

郡符木簡が発見されたことで、つとに文献史学者には著名である屋代遺跡群は長野県更埴市（現在の千曲市）に存在し、1990年から1995年まで、長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている（長野県埋蔵文化財センター, 1999）。その発掘範囲が巨大であるため、様々な性格の遺構が発見されている。遺構は、縄文時代から近世まで検出されている。

範囲が広大なためもあって、様々な地点から「奉書土器」が合計21点⁵出土しているが、ここでは、「奉書土器」が多く出土した⑤・⑥地区に注目したい。この地区では、7世紀後半から水辺祭祀が行われており、その後、官衙風建物群が成立し、各種工房も集中して、大規模な祭祀が行われるようになったと推測されている。文書木簡が使用されたのもこの時期であろう。

しかし、8世紀半ば以降になると、大規模な建物群は消滅し、木簡や木製祭祀具をはじめとする遺物も急速に姿を消し、その後、竪穴住居を中心とした一般的な集落へと変貌する。「奉書土器」は、一般的な集落へと変貌した後の遺構において、発掘されているのである。屋代遺跡は初期国府あるいは郡家の可能性が高いとされている遺跡であるが、「奉書土器」に関しては、国府や郡家との関係性はほとんどないと言っても良いようである。

さらに屋代遺跡群は1996年から2000年まで、更埴市教育委員会によっても調査が行われている（更埴市教育委員会，2002）。これは、官衙遺跡の範囲確認という目的もあったらしい（更埴市教育委員会，2002：4）。ここでは、「奉書土器」が出土しているG地区のみに注目したい。G地区からは29棟の住居跡と2棟の掘立柱建物が検出された。出土遺物は土器や瓦などが出土している。G地区は官衙というわけではなく、一般住居であったと考えられよう。

⑤・⑥地区およびG地区を含め、いくつかの場所からも、「本」が出土しており、「奉」は出土していない。

なおG地区の掘立柱建物の創建年代は8世紀後半から9世紀ごろであると推定されていることから（更埴市教育委員会，2002:130）、「奉書土器」も同時期のものである可能性もあろう。

3. 寺崎遺跡群向原遺跡（千葉県）（佐倉市寺崎遺跡調査会，1987）

寺崎遺跡群向原遺跡は、千葉県佐倉市寺崎地区に所在する集落遺跡と考えられる。1980年から86年まで、佐倉市寺崎遺跡群調査会によって発掘調査が実施されている。

遺跡の年代は報告書に詳細が記されていないが、弥生時代から奈良平安時代のものと考えて良いようである。方形周溝墓が43基、弥生時代後期の竪穴住居址が52軒、土師器が出土する竪穴住居が88軒、掘立柱建物址が121棟のほか、土坑や柵列が検出されている。特筆すべきは、掘立柱建物のなかに、廂または廻廊を有すると思われるものが13棟検出されている点である。また、3棟は総柱建物であった点も注目すべきであろう。やや特殊な掘立柱建物址が検出されている点から、ごく一般的な集落遺跡と単純に考えるのに対して慎重であるべきかもしれない。

「奉書土器」は、竪穴住居および掘立柱建物から86点の土器が出土しており、「奉」は存在しない。また、一つの竪穴住居から数点の「奉書土器」が出土している場合もある。

4. 落合Ⅱ遺跡（岩手県）（岩手県教育委員会，1980年）

落合Ⅱ遺跡は、岩手県江刺市愛宕に存在する集落遺跡と考えられる。1974年に岩手県教育委員会によって発掘調査が実施されている。

遺構は、主に平安時代のものが検出され、Aブロックは旧河道で、Bブロックは竪穴住居跡1棟が存在したとされる。遺物は、Aブロックから平安時代の土師器、須恵器などの土器、木製品、動植物の遺体、また木簡も出土している。木簡は「差良紫豆 二斗八升」とあり、6033型で、付札木簡と思しきものである。Bブロック以南から、土師器、須恵器が出土している。

⁵ 本章では25点以上を取り上げるとしていたが、著名な遺跡であるので、ここで概観しておく。

「奉書土器」については、落合Ⅱ遺跡から出土した墨書土器173点のなかで、Aブロックから類例がないほど大量に出土している。字形は一見すると「本」と読めるものがほとんどで、「奉」と読めるものは存在しない。

木簡や墨書土器が大量に出ているためか、『江刺市史』によれば「官衙色彩の強い遺跡」としている（江刺市, 1981: 135）。確かに木簡や大量の墨書土器から考えて、単純な集落遺跡とも思えないが、容易に評価することは難しい。

5. 東那珂遺跡（福岡県）（福岡市教育委員会, 1995）

東那珂遺跡は、福岡県福岡市博多区東那珂1丁目に存在する集落遺跡と考えられる。1993年から94年まで、福岡市教育委員会によって発掘調査が実施されている。東那珂遺跡からは8点の「奉書土器」しか出土していないが、西日本では「奉書土器」が25点以上出土している遺跡は存在しないので、比較検討のため、あえてここで概観することとした。

調査の結果、弥生時代から中世前期までの遺構が検出されている。古代では、道路状遺構、溝状遺構、井戸、土坑、木棺墓、掘立柱建物が検出されている。掘立柱建物は6棟あったと見込まれている。井戸や土坑などから土器や布目瓦、越州窯系青磁などが多数出土している。

本稿で注目したい「奉書土器」については、調査区の西側約1/3を占める河川（SD-10）から出土している。このSD-10は、西側約200mを流れる御笠川の旧河道、もしくはその氾濫原と考えられている。調査区内で狐を描きながら流れており、蛇行しているらしい。遺物に関しては、主に上層から須恵器や土師器などが出土しており、大半は8世紀後半から末の遺物とのことである。坏や皿、蓋の底部外面や天井部外面に「本」が墨書で記されている。また、井戸（SE-27）からも「本」の墨書土器が出土している。「奉」は出土していない。

掘立柱建物が6棟あるのみであるから、寺院遺跡や官衙遺跡ではなく、一般集落の遺跡であると推測される。

V. 「奉書土器」およびその出土遺跡の特徴

前章では主に、「奉書土器」が25点以上出土している遺跡について概観してきた。ここでは、25点以下の遺跡にも注意しながら、「奉書土器」が出土する遺跡の特徴について考えてみたい。

第一に、様々な遺跡から出土しているという点である。明確に官衙と呼称できる遺跡からは出土例があまりないようにも感じるが、先述の通り、いくつかの城柵遺跡や国府遺跡からも出土している。ただしその数は少なく、データベースを検索してみても、よく知られる郡家遺跡からの出土例はあまりない⁶。むしろ大塚原遺跡のように、一般的な集落からも20点以上の「奉書土器」が出土していることから、一般集落の祭祀などでも用いられたと考えて良いだろう⁷。

第二に、その一方で、落合Ⅱ遺跡のように、「官衙色彩の強い遺跡」から出土している点も考慮したい。「奉書土器」とともに木簡も出土しており、単に一般民衆の住居とは思えない遺跡から「奉書土器」の出土が多いと言える。それらの遺跡は、郡家にまで比定できないものの、いわゆる郡家の出先機関や、里家（郷家）、駅家などの地方官衙末端機構の可能性もあろう。

⁶ 屋代遺跡に関しては、官衙遺構からではなく、一般住居跡からの出土であったことを確認しておく。長野県の恒川遺跡が例外であろうか。

⁷ ただし、一般集落の民衆が、「本」を「奉」の省略型と認識していたかは、非常に懐疑的である。

第三に、「奉」と「本」などのそれ以外とを比較してみると、「奉」が意外に少ないことである。またそれと同時に、両者が混在する遺跡は極めて少ないようである。II. で述べたように、三条遺跡と三ツ寺II遺跡では混在しているが、それ以外はほとんどなく、数えるほどでしかない。これは、逆に言えば、「奉」とそれ以外の文字とが同義であると認識していたのはごく一部の人のみであり、多くは「本」を「奉」と同義ではないと考えていたのではないかと。特に「本」を一般集落で記していた民衆は、その漢字の意味を知らずに、祭祀に用いるときは「本」を記す、程度の認識であったのではないだろうか。すなわち、民衆にとって「本」は祭祀におけるただの記号であって、文字ではなかったと推定したい。

ただその一方で、千葉県の場合をみると、「神奉」という文字が19例(表3)⁸知られているが、「神奉」は千葉県以外からの出土例は、群馬の1例を除いて出土していないようである。千葉県では祭祀で土器を用いるときに、その字義を理解しつつ「奉」あるいは「神奉」と記すことを認識していた一方で、他地域ではそれが理解されていなかったのではないだろうか。千葉県における奈良・平安時代の遺跡・遺物の特殊性は、あらためて考えてみる課題であろう。

表3 「神奉」と記された墨書土器一覧(稿)

県	遺跡名	出土遺構	釈文	器質	器種	記銘部位	年代	墨・刻など
群馬	多比良追部野遺跡	1井戸	神□(奉)	須恵	坏	底部		墨書
千葉	大袋腰巻遺跡	5竪穴住居	神奉	土師	甕	体部外面		線刻
	大袋腰巻遺跡	43竪穴住居	神日下部 神奉	土師	坏	体部外面 底部内面		墨書
	庚塚遺跡	1塚	神奉	土師	鉢	体部外面		墨書
	城次郎丸遺跡	012竪穴住居	神奉	土師	坏	底部外面		墨書
	馬橋鷲尾余遺跡 第2地点	50竪穴住居	神奉	土師赤色	坏	体部外面	9世紀前半	墨書
	長勝寺脇館跡	4縦穴	[神奉]命替	土師	坏	体部外面	9世紀前半	墨書
	長勝寺脇館跡	4縦穴	[神奉]命替	土師	坏	体部外面	9世紀前半	墨書
	塚越遺跡	7竪穴住居	丈部神奉	土師	坏	底部内面		墨書
	鳴神山遺跡 I地点	6竪穴住居	国玉神上奉 丈部鳥 万呂	土師	甕	体部外面		墨書
	西根遺跡	5流路	神奉 工	土師	坏	体部外面 底部外面	8世紀第4四半期 ~9世紀初頭	墨書 墨書
	西根遺跡	5流路	神奉 □	土師	坏	体部外面 底部外面	9世紀前半	墨書
	南借当遺跡	流路	奉玉泉 神奉	土師	坏	体部内面	9世紀後半	墨書
	館ノ山遺跡	東調査区 土坑SK-001	□人神奉	須恵器	杯	体部外面	8世紀末~9世紀 初頭	朱書
	堀尾(LOC16)遺跡	5井戸	加/神奉	土師	坏	体部外面 底部内面	9世紀前半	墨書 墨書
	庄作遺跡	25竪穴住居	[人面画] 丈部真次□ (召カ)代国 神奉	土師	坏	内面 体部 外面	9世紀前半	墨書 墨書
	庄作遺跡	25竪穴住居	罪公国玉神 奉[人面画]	土師	甕	胴部外面 胴部外面	9世紀前半	墨書 墨書
	庄作遺跡	46竪穴住居	上総[]秋人歳神奉 進	土師	坏	体部外面	9世紀前半	墨書
庄作遺跡	67竪穴住居	国玉神奉 手 [人面画]	土師	坏	底部内面 底部外面 底部外面	9世紀前半	墨書 墨書 墨書	
城次郎丸遺跡	012竪穴住居	神奉	土師	坏	底部外面		墨書	

⁸ 「国玉 神奉」「命替神奉」なども含める。

VI. 朝鮮半島における「奉書土器」と日本列島への移入

さてそもそも、「奉書土器」は、古代の日本列島のみで使用されていたものなのだろうか。ここで、朝鮮半島の墨書・刻書土器についても検討してみたい。

実はすでに、鈴木靖民氏、金在弘氏によって述べられていることであるが、この「奉書土器」は、朝鮮半島でもいくつか確認されている。

まず鈴木氏の見解を確認しておく（鈴木, 2014: 95）。氏は、日本の「奉書土器」の研究をまとめつつ、以下のように述べている⁹。

八～九世紀頃の新羅土器にも刻書があり、いずれも水辺・水場で出土する。疫気を払う行為とのつながりが容易に想像される（なお韓国の六世紀半ば以降の東海市湫岩洞古墳群の短脚高杯の「本」、昌寧市桂城古墳群の土器や甕棺の「大干」の刻書も、奉の略字と解釈して、死者や靈魂への供献儀礼の痕跡とみるべきかもしれない）。そして新羅から日本の本州へ、さらに北東北、そこから北海道へという伝播経路が予測できる。

次に、金在弘氏の研究を確認する（金, 2014）。金氏は、新羅の首都であった慶州の花谷里遺跡から出土した土器を検討し、特に「泰」「夫」の文字について、やはり平川南氏の研究を参考にしながら、祭祀で用いられたことを述べ、上記のものが「奉」が崩されたもの／略されたもので、やはり祭儀において用いられたと推定している¹⁰。

以上の検討によって、古代朝鮮半島においても「奉」を崩す／略すことがあったことを確認できたと思う。古代日朝関係のあり方を考えれば、常識的には、朝鮮半島において用いられた記号（あるいは文字）が、日本列島へ移入したと考えるのが自然であり、その逆の可能性は極めて低い。

以上、金・鈴木両氏の見解を紹介しつつ、朝鮮半島から日本列島に「奉書土器」が流入した可能性を指摘した。少し付け加えることがあるとすれば、現在の韓国で発見されている「奉書土器」と思しきものの多くは、朝鮮半島の南東部で発見されている点である¹¹。新羅の首都慶州で「奉書土器」が発見されていることから¹²、もちろん今後、新たに考古学的発見もあるかもしれないが、今のところ、土器に「奉」「本」などと記す祭祀文化は、新羅のものと考えてべきなのではないだろうか。上述のごとく、鈴木氏も「新羅から日本の本州へ」と述べているが、蓋し卓見と言えよう。

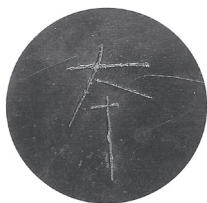


図3

⁹ なお引用中にある「大干」土器については（西谷, 1991）、（武田, 1994）などの研究があるが、鈴木氏が述べる通り、「奉書土器」と考えた方が合理的であると考え。

¹⁰ 土器の年代は判然としないようであるが、花谷里遺跡から出土する土器は7世紀から8世紀のものが主なものだという。なお花谷里遺跡については、（李, 2013）参照。

¹¹ 現在、筆者が確認できているものは、慶尚南道昌寧郡の桂城古墳群から「大干」と読めそうな土器が6点程度、江原南道三陟市の湫岩洞B地区古墳から「本」と読めそうな2点、慶尚北道慶州市花谷里遺跡から出土した「泰」「夫」の2点である。

¹² さらに土器ではないが、慶州市雁鴨池から、「本」と記された漆器が出土している（図3）。

前章でも推測したように、「本」「本」などの文字を、日本列島の民衆が「奉」の略字体として認識していた可能性は極めて低いと考える。記号自体が流入したと考えるよりは、「奉書土器」を用いた朝鮮半島での祭祀のあり方が、日本列島に移入されたと考えるのが良いだろう。そしてそれを移入した人々はおそらく、朝鮮半島から日本列島にやって来た渡来人と考えるのが自然である。

「奉書土器」を用いた祭祀を日本列島に移入したのが渡来人であるとすれば、自ずと次の疑問も出てくるだろう。周知のように、渡来人は少なくとも5世紀以来断続的に日本列島に移住していた。それにもかかわらず¹³、この「奉書土器」のあり方が8世紀半ば以降になぜ広まったのであろうか。

ここで、「奉書土器」を用いた祭祀文化が新羅系の文化であるとの憶測をふまえれば、自ずと上記の疑問への回答は導き出せよう。すなわち、5世紀以来、日本列島に渡来人は移住していたようであるが、当該期の日朝交流のあり方からすれば、渡来人の多くは百済系の人々であった可能性は高い¹⁴。また、白村江の戦い以後、いわゆる戦争難民が流入してくることは史料上確認できる。すなわち「百済の男女二千余人を以て、東国に居く」（『日本書紀』天智天皇五年（666）是冬条）とあることから、彼らの多くもまた百済系の移民である。

もちろん、白村江の戦い以後の渡来人のなかに高句麗・新羅系の人々も存在した。例えば『日本書紀』持統元年（687）3月己卯（15日）条に「投化せる高麗五十六人を以て、常陸国に居く。田を賦し、稟を受く。生業を安んぜしむ」、あるいは同じく丙戌（22日）条に「投化せる新羅十四人を以て、下毛野国に居く。田を賦し、稟を受く。生業を安んぜしむ」とある。これらの史料以外にも朝鮮半島全域から渡来した人の存在を示すと考えられる史料は多く存在しており（荒井，2015）、百済系だけではなく、朝鮮半島全域から日本列島に移住した人々が存在したことが知られる。

続いて8世紀の新羅系移民について考えよう。『続日本紀』宝亀五年（774）五月乙卯（17日）条には以下のようにある¹⁵。

大宰府に勅して曰く、比年、新羅蕃人、頻りに来着あり。その縁由を尋ねるに、多くは投化にあらず。忽に風漂せられ、引き還すに由なし、留りて我民と為る。本主を何とが謂はむ。自今以後、此くの如きの色は、宜しく皆放還して、以て引き恕を示すべし。如し船破及び絶糧あらば、所司事を量りて、帰計を得しめよ。

この史料は新羅から移動してきた人々の対応に関する史料である。山内晋次氏によれば、「流来」「帰化」の処置を明確に区別し、「流来」の者の送還を義務化したものである。さらに山内氏は、これをもって「「帰化」者は従来通り受け入れられている」と述べており（山内，2003：75）、8世紀の日羅関係¹⁶はさほど良くなかったものの、新羅系の人々が日本列島に移住していた可能性を示唆している。

事実、鈴木氏が繰り返し論じているように（鈴木，2011）（鈴木，2016）¹⁷、8世紀日本列島、特に藤原京や平城京において多くの新羅人が様々なかたちで活躍しており、また、新羅文化の日本列島への流入が、正倉院宝物などから確認できる。

以上のような状況を考慮すれば、8世紀の新羅系移民が、「奉書土器」の利用も含め、彼らの

¹³ 渡来人の研究は多くあるが（田中，2005）、近年の研究として（丸山，2014）（荒井，2015）を参照。

¹⁴ 滅亡する562年前後であれば、加耶諸国からの渡来人も存在したであろう。

¹⁵ なお同様の官符が『類聚三代格』にも収められている。

¹⁶ 8世紀の日羅関係については（李，1997）。近年の研究では（浜田，2011）がある。

¹⁷ また、古典的研究ながら（関，2009：199）による「この新羅人は、一時にとくに多数来たことはないようであるが、総計すればかなりの数に上るであろう」という指摘は、いまだ参考になる。

祭祀形態を日本へ移入し、そしてそれらはまずは宮都、そして東国を中心として全国に流行したのではないだろうか¹⁸。もちろん、決定的な確証はまったくなく、推測でしかないのであるが、本稿では以上のように考えておきたい¹⁹。

VII. おわりに

「奉」「本」「本」などと記された土器（「奉書土器」）について、明治大学古代学研究所で公表されているデータベースを用いつつ、それが出土する遺跡の特徴について検討した。さらに「奉書土器」の源流を朝鮮半島に求め、日本列島における流行の主体を新羅系移民と考えた。不慣れな考古学的遺物を扱うだけでなく、新羅文化の移入に関する記述にあたっては推測が多く、実証不十分であることは承知している。また未完成のデータベースを使用することに対する批判もあろう。諸賢のご叱正を仰ぎたい。

参考文献

<日本語文献>

- 荒井秀規 2015年「渡来人（帰化人）の東国移配と高麗郡・新羅郡」『古代東ユーラシア研究センター年報』第1号
- 有富純也 2011年a「軍団と郡家」『明治大学古代学研究所紀要』第15号
- 2011年b「静岡県墨書・刻書土器集成（稿）」『明治大学古代学研究所紀要』第15号
- 小口雅史 1993年「「夫」字窠（墨）書について」『海峡をつなぐ日本史』東京：三省堂
- 佐伯有清 1986年「刻字土器「夫」の意義」『サクシュコトニ川遺跡』北海道：北海道大学
- 2003年「北大構内サクシュコトニ川遺跡出土の「夫」字土器研究とその後」『北海道大学総合博物館研究報告』第1号
- 柴田博子 2014年「鹿児島県春花地区遺跡群出土ヘラ書き土師器」『日本古代の国家と王権・社会』東京：塙書房
- 鈴木靖民 2011年「古代東アジアのなかの日本と新羅」『日本の古代国家形成と東アジア』東京：吉川弘文館
- 2014年「無文字社会と文字・記号の文化」『日本古代の周縁史』東京：岩波書店
- 2016年a「平城京・藤原京の新羅文化と新羅人」『古代日本の東アジア交流史』東京：勉誠出版
- 2016年b「古代日本の渡来人と技術移転」同上書
- 関晃 2009年『帰化人』東京：講談社
- 高島英之 2000年『古代出土文字資料の研究』東京：東京堂出版
- 2006年『古代東国地域史と出土文字資料』東京：東京堂出版

¹⁸ 以上のような推測が成り立つのであれば、8世紀半ば以降の在地祭祀も日本列島固有のものではなく、新羅系の文化と混成されたものと言えるかもしれない。また、いわゆる人面墨書土器も「奉書土器」と同じ性質をもつものではないかと推測しているが、まったく根拠はない。いずれも後考を俟ちたい。

¹⁹ 今ひとつ問題なのは、朝鮮半島の「奉書土器」は墨書土器ではなく、刻書土器であるという点である。「奉書土器」に限らず、古代朝鮮半島では墨書土器が日本列島と比較すると極端に少ないらしい（具門慶氏のご教示による）。この点については今後の課題としておきたい。

- 武田幸男 1994年「伽耶～新羅の桂城「大干」」『朝鮮文化研究』第1号
- 田中史生 2005年『倭国と渡来人』東京：吉川弘文館
- 西谷正 1991年「朝鮮三国時代の土器の文字」『古代の日本と東アジア』東京：小学館
- 浜田耕策 2011年「日本と新羅・渤海」『日本の対外関係2 律令国家と東アジア』東京：吉川弘文館
- 平川南 1998年『墨書土器の研究』東京：吉川弘文館
- 丸山裕美子 2014年「帰化人と古代国家・文化の形成」『岩波講座日本歴史2 古代2』東京：岩波書店
- 三上喜孝 2013年『日本古代の文字と地方社会』東京：吉川弘文館
- 2016年「文字がなくなると古代東アジアの宗教と呪術」『古代東アジアと文字文化』東京：同成社
- 山内晋次 2003年「朝鮮半島漂流民の送還をめぐる」『奈良平安期の日本とアジア』東京：吉川弘文館
- 李成市 1997年『東アジアの王権と交易』東京：青木書店
- 若狭徹 2004年『古墳時代の地域社会復元・三ツ寺Ⅰ遺跡』東京：新泉社

< 県史・調査報告書 >

- 青森県 2008年『青森県史 資料編 古代2 出土文字資料』
- 岩手県教育委員会 1980年『岩手県文化財調査報告書50 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』
- 江刺市 1981年『江刺市史5 資料編 考古資料』
- 鎌ヶ谷市教育委員会 1988年『双賀辺田No.1遺跡発掘調査報告書』
- 群馬県埋蔵文化財事業調査団 1989年～1991年『三ツ寺Ⅱ遺跡』
- 更埴市教育委員会 2002年『屋代遺跡群 附松田館』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991年『塚の越遺跡』
- 佐倉市寺崎遺跡群調査会 1987年『寺崎遺跡群発掘調査報告書 向原遺跡・上城堀遺跡・一本松遺跡』
- 長野県小諸市教育委員会 1994年『大塚原（第二次）』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999年『更埴条里遺跡群 屋代遺跡群 古代1編本文』
- 奈良文化財研究所 1992年『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』
- 奈良文化財研究所 2003年『平城宮出土墨書土器集成Ⅲ』
- 福岡市教育委員会 1995年『東那珂遺跡1』
- 山形県埋蔵文化財センター 2001年『山形県埋蔵文化財センター調査報告書93 三条遺跡第2・3次発掘調査報告書』

< 韓国文献 >

- 김재홍 (金在弘) 2014年「新羅 王京 출토 銘文土器의 생산과 유통 (新羅王京出土銘文土器の生産と流通)」『韓国古代史研究』第73号
- 이동주 (李東柱) 2013年「경주 화곡 출토 在銘土器의 성격 (慶州花谷遺跡出土在銘土器の性格)」『목간과 문자 (木簡と文字)』第10号
- Gyeongju National Museum 2002年『Anapji Hall』

<各図の出典>

図1 埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1991 : 197

図2 鎌ヶ谷市教育委員会, 1988 : 21

図3 Gyeongju National Museum, 2002 : 150